



## 第4分科会

## 「文学作品inアクティブラーニング」

たつみ 都志 氏

(谷崎潤一郎研究者・作家)



・武庫川女子大学 名誉教授  
・芦屋市谷崎潤一郎記念館 副館長  
■主な著書  
『ここですやろ谷崎はん』(谷崎潤一郎・関西の足跡) (広論社)

高校の教育現場で採り入れてほしい、文学作品を題材としたアクティブラーニング(以下AL)を、とのことだったが、氏は自己紹介もそこそこの本日の講演の狙いについて話された。そこには、ALについての具体的な方法ではなく、実践例や基本的な考え方を紹介することで、受講者自身の教材・教案作りの一助としたという熱い思いがこもっている。事実、講演は「こうしなさい」「こうしたほうがいい」というようないわゆる伝授型のそれではなく、「こんなことをしたことがある」「こんな考え方はどうでしょう」というような、具体的な方法や内容の部分についてはこちらに委ねる、いわゆる提案型の手法で進められた。どのような材料を用意し、どのように実践するかは各人各様、勤務校の実態にも柔軟に合わせられる、まさに考え方のテンプレートを示していただいたようなものである。ここにその一部を紹介したい。

まず、基本的な考え方として、「ALは部活動と同じ」と切り出された。氏は様々なテレビドラマの中でのセリフや状況をうまく用いて、受講者にイメージしやすいように工夫して講演されていたのだが、先ほどの考え方は、某社会派テレビドラマの中のセリフにもあったようだ。「部活動において生徒は各自が自ら考え行動し、生徒間で意見交換や叱咤激励も行われる。そして教師は、生徒それぞれの個性や特性を把握し、うまくやれるための流れを作っているのが仕事だ。」つまり、「グループを作って生徒に丸投げするだけのものはALではなく、意図的に役割を意識した抜擢を行ってでも、(プロジェクトが)うまくいく流れを体験させることこそがALである」という

のが氏の主張である。文科省が定義しているところでもあるが、ALは本来「社会」との関連を念頭に置いて導入されたものであり、学校において社会と同様に仕事(プロジェクト)の流れを知り、実践させていくことこそがALの目的であるということだ。

次に、「社会に答えはなく、この答えがないことを体験させることも重要」と続けられた。古典を学ぶ意義についても同じで、答えよりも考えること、考え続けることが大切であると強調され、松尾芭蕉の「不易流行」という言葉を挙げながら、自身の研究しておられる谷崎潤一郎の文学作品や、吉本ばなな氏の「キッチン」での実践例に移られた。

また、氏によると受験生においてもALは有効であるという。ここにも部活動という考え方を採り入れ、受験生を全国大会に出場するチームと考えることで、チーム内で個々が活動しながら他人に教える「アウトプット」が、知識の整理となるだけでなく、コミュニケーション能力やモチベーションの向上にも繋がることとなり、結果として、「個人の勝利」から「チームの勝利」に持つていくことができるのではないかと、とのことであった。

講演後の意見交換会では、「ALでの課題設定について」「定時制でのAL」など多様な意見が出されたが、氏はそれらへの解決手段として一貫して「部活なら」「企業なら」という考えを持つことを示された。しかしながら、最後の「二〇二〇年度入試とALの関係」についての質問には、現行の制度のままでは指導と評価の不一致は否めず、現場は求められたことをできる範囲で悪戦苦闘しながら挑むしかないだろうとの回答にとどめられた。まずは自分たちで変えられる定期考査から変えていくことが我々にできる一歩目なのかもしれない。

